Osaka University Knowledge Archive

Title	大阪万博アメリカ館とQUILT : 日本におけるキルトの受容
Author(s)	片桐, 真佐子
Citation	デザイン理論. 2018, 72, p. 118-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70573
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪万博アメリカ館と QUILT ── 日本におけるキルトの受容 ──

片桐真佐子　奈良女子大学大学院

１．はじめに

本発表の目的は，日本万国博覧会（以下，大阪万博とする）のアメリカ館にキルト* が展示された事実を明らかにし，アメリカのキルトが日本で受容されてゆく要因の一つとして，アメリカ館のキルトについて考察することである。1975年・1976年のアメリカの著名なキルトコレクションのキルト展が東京と京都 で開催され，その頃からアメリカのキルトが 日本人のキルター（キルトを作る人）に注目されていくのであるが，その５年前にアメリカのキルトが大阪万博で展示されていたことは日本におけるキルトの受容においてどのように位置づけられるのであろうか。

２．大阪万博アメリカ館のキルト

大阪万博は，映像・写真集・ガイドブックなど多角的に記録されている。しかし，アメリカ館のキルトについては，『アメリカ館日本万国博覧会於大阪』（アメリカ情報局発行の冊子）と大阪府日本万国博覧会記念公園事務所に保管されていたアメリカ館の展示風景の写真だけが情報源であった。それらの写真から，キルトは少なくとも７枚であることがわかる。

アメリカのキルトは，いくつかのブロックを縫い合わせ，１枚のキルトにするのが一般的である。ブロックは布を幾何学的なデザインで縫い合わせて作られており，そのため，パッチワークキルトやピースドキルトともいわれている。布の幾何学的なデザインはパターンと呼ばれ，それぞれに特徴ある名前がつけられている。

７枚のキルトのうちの１枚は，1986年，『デンバー美術家所蔵アメリカンパッチワークキルト展』において日本で再び展示され，マートル・M・フォートナーという女性が1934年に作った〈マッターホルン〉ということがその図録から判明した。のこりの６枚については，オーシャン・ウェーブ，ログキャビン，ライジング・サン，アイリッシュ・チェーン，ヤコブの階段（またはフォー・パッチ）という使用されているパターン名，19世紀に流行したクレイジーキルトというスタイルが確認できたが，制作者・制作年代・現在の所蔵先などは不明である。

３．考察

１）万博の歴史

万博の歴史は，1851年のロンドンに始まる。イギリスの産業力を誇示した「The Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations」は，無料の産業振興的なイベントではなく，有料で「見る」ことを楽しむお祭り的な要素を内包するものであった。そのため，万博はモノの単なる陳列に留まらず，国際的なプロモーションの場として，機械技術による進歩こそが幸福であるかのようなイメージを人びとに発信し続けた。1855年にパリで開催された万博は，「L'Exposition universelle」（万物博覧会）というネーミングからも従来の伝統的な産業までも国際的なプロモーションの場に引き出そうとしたことがうかがえる。さらに，1893年のシカゴ万博では産業における女性の活躍が取り上げられ，これまで「やる側」になれなかった女性たちが計画・設計から運営までおこなった女性館

Women's Building が登場する。また，1933年のシカゴ万博からテーマが設けられた。

「人類の進歩と調和」をテーマとした大阪万博のアメリカ館には７つの展示ユニットがあり，アメリカの現在と歴史的なアメリカが写真や絵画，現物によって紹介されていた。キルトは，19世紀の開拓者たちやアメリカ先住民たちの手による100点以上の生活用品とともに，「folk art」というユニットの一角に並べられていた。前述の，アメリカ情報局のキルトの写真には「pieced quilts」というキャプションがあり，「刺し子の布団」と日本語訳が添えてあった。キルトは，まさに開拓者たちの防寒のための実用品として紹介されていたのである。「folk art」展がアメリカの歴史を物語るとするのではあれば，キルトは女性の歴史を物語っているのだろうか。

ヨーロッパから移民してきた開拓者の女性たちが冬の寒さから家族を守るために貴重な布を縫い合わせ，縫い集めて作ったキルトは，文字によらない女性の日記でありアルバムでもある。家族を暖かく包みながら家族の歴史として子孫へと伝えられていったように，キルトはアメリカの，白人たちのアイデンティティーを象徴するものではないか。

２）アメリカ館のキルトを見たか

選択方式の回答（複数可）とする質問票を作成し，アンケートでは24人のキルターのうち20人から回答を得た。また，「布にこひして ── 片桐好子のキルト ── 展」（2017年８月26～27日，奈良県文化会館）では質問票をもとに８人にインタビューした。ほとんどがキルトに気がついておらず，その理由として，アメリカ館へ入館しなかった，話題の展示品を見たことは覚えている，大阪万博そのものに行っていない，などであったが，あるキルターは刺繍の先生がアメリカ館のキルトの話をしていたと話していた。

７枚のうち判明したキルトの大きさは，縦260センチ×横214 センチというかなり大きなものである。そのことから，ほかの６枚も２メートル四方ほどの大きさであることが写真から推測される。そのような大きなものが人の目に留まらなかったのはなぜだろうか。

中谷文美が「ミシンは女性を解放したか？ ── インドネシア女性にとっての縫製労働の意味 ──」（『女性歴史文化研究所紀要』第14号，京都橘大学，2006年３月，pp. 14-15）で，ミシンを男性の道具，機を女性の道具とみなす認識がインドネシアの伝統的な文化規範にはあると分析したが，アメリカの伝統的な文化規範にも，男性と女性の領域を分かつような認識があっても不思議ではない。それが，宇宙船とキルトであれば，ハイテクノロジーの宇宙開発技術を男性の領域とし，その対極の女性の領域として，キルトは展示される必要があったと考えられるのである。

４．まとめ

大阪万博アメリカ館のキルトは，アメリカの白人たちのアイデンティティー，伝統的な女性の領域の象徴として展示され，当時の日本人はアメリカのキルトを新しい手芸としてその前を通り過ぎ，足を止めた。戦後，手芸への情熱は解放されていったものの，高度経済成長期は宇宙船や「月の石」のような男性の領域を重要視した。家族のあり方の変化を敏感に感じ，家族のほころびをまるでパッチワークのように縫い留めるかのように70年代後半の日本でキルトが注目されてゆく。その端緒として，大阪万博アメリカ館のキルトは位置づけることができる。

＊キルトとは，表布と裏布のあいだに綿などの芯を入れ，それらをキルティングと呼ばれる刺し縫いで縫い合わせたものである。